

2008/12/11 (木) 21:54

中村さま

お世話になっております。

サンクチュアリ出版の 　　　　　　です。

本日はお忙しい中、ご足労いただきありがとうございます。

ホスピタリティに関するお考えに、とても感銘を受けました。

原稿を添付させていただきました。

急なスケジュールでまことに恐縮ですが、

各エピソードへの解説と、はじめに、おわりに、の執筆をお願いします。

またどこか不整合がありましたら、チェックをお願いいたします。

それでは次第に寒さが厳しくなってきましたが、

どうかご自愛くださいませ。

\_\_タイトル案 (未定)

夢の国のおもてなし／ディズニーランドの心温まる話／ディズニーランドで起こったやさしい奇跡／

\_\_内容

東京ディズニーランド開業にかかわり、約 20 年間、当園のスーパーバイザーをつとめた著者（現コンサルタント）がキャスト育成、指導に使っていた「キャストとお客さんとの心温まる話」

\_\_補足

この本で紹介するエピソードは主に、ディズニーランドへ寄せられたゲストからの手紙やコメント、またキャストたちのレポートから、特に筆者の印象に残

ったものを抜粋しています。

### \_\_まえがきイメージ

ディズニーのキャストたちだけが知っている、秘密の物語があります。それはディズニーのスーパーバイザーたちが、キャストの人材育成のために、研修で語って聞かせている、パーク内で本当に起こった出来事です。その話を聞いたキャストたちは、感動で涙し、自分たちの仕事により一層強い誇りを持ちます。誰かのために一生懸命働くことの本当の意味に気づくことができるからです。そしてディズニーという偉大な存在の一部であることを再確認します。この出来事の数々をより多くの人に知っていただきたいと思い一冊の本にまとめました。この本によって、明日からの人生をさらに輝かせるきっかけにいただければ幸いです。

### \_\_コンテンツ

導入

まえがき

ゲストからキャストへの感謝

キャストからゲストへの感謝

短いあとがき

### \_\_スケジュール 1月末～2月末発売想定

- 1 発売2ヵ月前に原稿完成、営業スタート
- 2 デザイン、イラスト、各種チェック
- 3 発売1ヵ月前に入稿

### \_\_中村さんをお願いしたいこと

- ・各エピソードの解説、まえがき、あとがきを書いていただく。
- ・おかしいところがないか修正、チェックをしていただく。

・(デザインに落としたあと) 元副社長の方、現役キャストの方々からコメントをいただく。

※ここからが本文です。現時点では構成を考えず、順番はバラバラです。

## ■導入イメージ

ディズニーランドは遊園地ではない。青空を背景にした、とても大きな舞台だ。

ミッキーマウスの産みの親、ウォルト・ディズニーがディズニーランドに求めたものは、お客様たち全員が映画の世界に入りこみ、その中で一緒に感動を作り上げていくことだった。

だからここではお客様をゲスト（共演者）と呼び、従業員をキャスト（出演者）と呼ぶ。ランドは永遠に完成しない、と言う。つねに新しい感動を創り続ける空間であり、キャストたちはその機会を探し続けるために存在するのだ。地図を見ている人がいれば「どこかお探しですか？」と声をかけ、カメラをかまえば「撮りましょうか？」と手をさしのべ、一人ぼっちの子どもを見つければ「お母さんどこかな？」と一緒に探す。とはいえキャストたちは決して善意を売り歩いているのではない。彼らはディズニーを訪れるすべての人々に喜んでもらうことで、自分たちが「生きている」という感触を日々確かめているのだ。そういう態度の延長状に、マニュアルを超えた“ありえないほど優しい”サービスがあり、そこからディズニーランドにまつわる人たちの心温まる話はじまる。

## ■娘の誕生日

私は娘を病気で失いました。

当時5歳、もしも幼稚園に入れていたら年中さんです。ひらがなとカタカナが読めるようになり、いろんなことに興味を持ちはじめたころ、突然病気にかかり、原因がわからず、治す手だても見つからないまま他界してしまいました。

娘の死は、私たち夫婦をたいへん苦しめました。

とくに妻は精神が不安定になり、私と少しでも意見がかみ合わないといきなり大声で泣き叫んだり、食器を投げつけたりするようになりました。

私ももちろん娘を失って深く傷ついていました。でも、妻の苦しみを理解していたつもりなので、彼女のヒステリーはいつも黙って見過ごしていました。妻は私が仕事で家を空けている間もずっと娘と一緒にでしたし、娘が病気になり入院してからもずっとそばに付き添っていたのです。私は残業を理由に、病院へ行かないこともしょっちゅうでした。

ずっと妻に対して悪いなとは思っていました。でもいずれ娘が退院できたとき、どこかへ遊びに連れていけば埋め合わせができるだろうと、気楽に考えていました。

そして仕事先で娘の訃報を聞いた瞬間、私は自分の大きなあやまちに気がつきました。なんというかけがえのない時間を見過ごしてしまったのだろう。もっと長く、1分でも長く、娘と一緒に過ごしていればよかった。たとえ死を避けられなかったとしても、最期を看取るまでずっとそばにいてあげたかった。本当に後悔しました。

子どもに先立たれた夫婦のころには、先行きの見えない真っ暗な穴が、どこまでも大きく広がっていくと言います。実際、そのとおりだと思いました。ときどき、うちの子はやかましい、言うことを聞かなくて憎らしい、と感じることがあったとしても、その子が最初から「いない」という日常を仮定してみると、その先のことはもうなんにも考えられません。我が子を失うという事態は親にとって、自分たちのこととしてまったく理解できないのです。

喪失感に耐えきれなかった私たち夫婦は、ただ毎日けんかを繰り返すしかありませんでした。私もいけないとは思いつつ、ときどき言い返してしまうことがありました。状況はどんどん悪くなっていきました。そんな風にして私たちは精神的にも、肉体的にも疲れ果てていきました。

ある日、妻と近所を歩いていたときのことで。彼女は言いました。「ただあの子が元気なだけで幸せだったのに。突然いなくなっちゃうなんてつらすぎるよね。私たち、これから一体なにをすればいいんだろう。今までなんのために一緒に暮らしてきたんだろう。よくわからなくなった」

妻は目にいっぱい涙をためて、公園で遊ぶ子どもたちを眺めていました。あとで聞いた話ですが、妻はこのときいつでも娘の後を追えるよう、家に練炭を隠していたそうです。

「ディズニーランドに行ってみようか」

ある日、私はふとそんなことを思いつきました。そして少し迷ったあと、その考えを妻に提案しました。

「なんで、突然」

「いちおう約束だったし」

生きていれば、その日は娘の誕生日だったのです。本来ならばお祝いをしてあげたはずだし、もしそのとき娘が元気に歩き回れるようだったら、大好きなディズニーランドへ遊びに行っていたはずだからです。そう約束していました。娘がベッドの上で息を引き取るまで、ずっとミッキーのぬいぐるみを手離そうとしなかったことも強く印象に残っていました。

「いやよ。いい年した夫婦だけで行ってどうするの」

いいじゃないか。私は元気をふりしぼって言いました。

「我が家の最後のイベントなんだから」

私たちは夫婦二人でディズニーランドに行きました。

そしてすぐに後悔しました。幸せそうな親子連れとすれ違うたびに、胸がしめつけられる思いをしたからです。ミッキーの帽子をかぶって楽しそうにじゃれ合っている親子。カメラをかまえているお父さん、子どもの手を引くお母さん、大声ではしゃぎまわる子ども。特に同じくらいの年であろう子どもを見るたびに、熱いものがこみ上げてきました。私たちも本当は同じことをしているはずだった。小さな手のあったかさを思い出しました。「お父さん、お母さん」と私たちを呼ぶ声がよみがえりました。もし娘と一緒にいたらどのアトラクションに乗っていたんだろう。どんなお菓子を食べながら、どんな話をしながら歩いていたんだろう。園内のどこに目をやっても、娘の笑顔ばかりが頭に浮かびました。

「来なければよかったのかな」

妻も同じことを考えていたのか、厳しい表情で私を見ました。

「帰りましょうよ。しょうがないのよ。あなたといっても悲しくなるだけなのよ」

私は、その言葉を宣告として受け止めました。

一緒にいるから子どものことを思い出してしまう。それは私も同じ気持ちでした。この救いようもない泥沼から這い上がるためには？ お互い、新しい幸せを見つけるためには？ 導き出せる結論は一つしかありませんでした。

子どもを亡くした夫婦は、必ず離婚を意識するそうです。お互いに今以上、傷つきたくないと思うからです。またそうすることが亡くした子どもに対する、一番の償いだと考える夫婦もいるようです。

それぞれに思いを巡らせながらも、私は予約してあったレストランに妻を誘いました。これが夫婦にとって最後の食事になるだろうことは意識していました。

娘が生きていたらさぞ喜ぶだろう、ミッキーマウスのショーをすぐ近くで見られるレストランです。心の中は亡くなった娘でいっぱいでした。なにを食べてもきっと味なんてわからないでしょう。子どもを思い出したくない、でも忘れたいとも決して思いません。一緒に過ごした楽しい思い出は、夫婦だけで共有している。楽しかった分だけ悲しい記憶が、これから残酷なまでに長く続いていく。そんな絶望の波が押し寄せるたびに、夫婦の間に重いため息がこぼれました。

「お待ちしておりました。こちらにお席をご用意しております」

キャストのあとについていくと、店内全体がよく見わたせる広いテーブルに案内されました。空いている椅子は、亡くなった子どもの分です。それは私と妻の間にぽつんとありました。

あいにくその日は非常に混んでいました。それなのに私たちは余分に席をとっています。どう考えてもほかの家族連れに席をゆずるべき状況です。ひとりのキャストが近づいてきて言いました。

「お客さま。大変申し訳ございませんが、ご夫婦さまでしたら、二人掛けのテーブルに移ってはいいただけないでしょうか。ご家族連れでお待ちになっているお客様が大勢いらっしゃいますもので…」

まったく言うとおりでした。ディズニーランドに限らず、レストランを利用する人にとって当然のマナーでしょう。しかし私は申し訳ないと思いながら言いました。

「混んでいるのはわかっているんです。できることなら僕も席をゆずってさしあげたい。でも実は昨年、娘を病気で亡くしていて、今日はその子の6回目の

誕生日なんです。本当はこの真ん中の席は、子どもが座る予定だった。約束していたんです。だからわがままを言って申し訳ないですが、もう少しだけこのテーブルにいさせていただけませんか」

真剣な表情で耳を傾けていたキャストは、すこしうつむいたあと「お客さま。それは大変失礼なことを申し上げてしまいました。どうぞそのままゆっくりおくつろぎくださいませ」と言い残し、テーブルから離れていきました。

しばらくすると食事が運ばれてきました。注文したフレンチのコースは二人分だったのに、なぜかもう一人分の料理が真ん中の席に置かれます。オレンジジュースも頼んだ覚えがありません。私はあわててキャストを呼び戻しました。

「子どもの分は注文してませんよ」

キャストは笑顔でこたえました。

「お子さまの分は私たちのサービスです。どうぞお気になさらないでください」

しばらくすると天井の照明が少し落ちて、「みなさま、食事をお楽しみのところ申し訳ありません」というアナウンスが流れました。

なんだろうと思い、声がする方を見ると、ろうそくの火がついたケーキを片手に持って、行儀よく立つキャストの姿がありました。

「本日は特別な日です。ここにいらっしゃるお子さまの誕生日なのです。どうかみなさま、よろしければ一緒にバースデイソングを歌ってください」

店内に BGM が流れ出すと、ケーキを持ったキャストがこちらに歩いてきました。するとおおぜいのお客さんが一斉にこちらを向いて、手拍子をしながらバースデイソングを歌ってくれました。

ろうそくの火が消えました。どういうわけか自然に消えたのです。

「もう一度盛大な拍手をお願いします」

私と妻が立ち上がっておじぎをすると、おめでとう、おめでとうという声が上がって、大きな拍手につつまれました。

そのままショーがはじまりました。そして私たちは奇跡と出会ったのです。

真ん中の席に子どもがいる。誰もいないはずの席で、子どもがミッキーのダンスを見ながら笑っているのです。

ああ。そうだ。そうだ。きみと一緒に見たかったんだよ。私は涙があふれるのもかまわなかった。ただ、娘が手を叩いて喜ぶ姿を見つめました。前よりも少し大きくなった気がしました。うん、大きくなった。はなをすする音が聞こえました。妻も唇を震わせながら娘を見つめていました。

「僕らは間違っていたのかもしれない」

妻は私の言葉には答えず、ハンカチで目をおさえました。

「別れても、この子が喜ぶはずないじゃないか。僕らがこんな状態じゃ、安心して天国にもいけないんだ…。たしかにこの子がいなくなってすごくつらい。それでもきっと、僕らは今よりもっと前に進まなければいけない」

「ねえお父さん、お母さん」娘は左右にいる私たちを交互に見て、ニコっとほほえみました。

「今日はありがとうね」

盛大なショーが終わって、再び店内に明かりがともされます。ゆっくりと静寂が戻ってくると、今まさに起こった出来事が、急に夢のように思われました。

テーブルの上には、手がつけられていない料理とオレンジジュースだけが残されています。しかし妻は誰もいない席を、まだ愛おしそうな目で見守っていました。

これは夫婦ふたりだけが体験した出来事です。証拠はなにもありません。ただ私たちには、この奇跡を疑う理由はありませんでした。

私たちは寄り添い、まだにぎわいの残るディズニーランドを後にしました。

☆

## ■サイン帳

ある日、インフォメーションに一人のお父さんが暗い顔をしてやってきました。そして元気なさそうに言いました。

「あの…落とし物をしてしまって」

「どういったものでしょうか？」

「サイン帳です。子どもがミッキーとかミニーちゃんのサインが欲しいって、ランドのいろんなところを回って書いてもらったものです。あと少しでキャラクター全員のサインが揃うところだったんですが…」

サイン帳はインフォメーションには届けられていませんでした。キャストは思いついた場所に電話をかけて、そのサイン帳のことをたずねてみましたが、やはりどこにも届いていませんでした。

キャストは落とししたサイン帳の特徴を詳しく聞きました。

「ご滞在はいつまででしょうか？」

「2泊3日のツアーに参加していて、2日後のお昼には帰ることになっています」

「それではこの後、もう少し探してみますので、あさってお帰りになる前にもう一度こちらにお立ち寄りくださいますでしょうか。それまでには見つけれれると思いますので」

そのお父さんが帰ったあと、キャストはさらにいくつかの小さなセクションに電話をかけて、サイン帳のことをたずねました。それから家族が歩いたはずのルートを、足でたどりましました。またランドから出て、駐車場や駅へ向かう道も探してまわりました。

ところが、どうしても見つからなかったのです。キャラクターのサインが書いてあるサイン帳ですから、誰かがそれを拾ったとき、うれしくて持って帰ってしまったのかもしれませんが。

2日後になって、この間のお父さんがインフォメーションに現れました。

「どうでしたか？」

たぶん見つからなかっただろう、という口ぶりでした。

キャストは残念そうに答えました。

「大変申し訳ございません。懸命に探したのですが、サイン帳を見つけることはできませんでした。でもお客様…」

1冊のノートがさしだされました。

「どうぞこちらのサイン帳をお持ち帰りください」

お父さんがびっくりして中を開くと、なんとそこにはキャラクター全員のサインが書かれていたのです。キャストは落としたサイン帳と同じものを、お店で見つけてきました。それを自分で買い、いろんなエリアを回って、すべてのキャラクターたちにサインを書いてもらったそうです。

お父さんはもちろん大喜びしました。そしてお礼を何度も言って帰りました。

この話はこれで終わりではありません。

後日、そのお父さんから一通の手紙が届きました。

\*

先日はサイン帳の件、本当にありがとうございました。

じつは連れてきていた息子は脳腫瘍をわずらっていて、いつ大事に至るかわからないような状態だったのです。

息子は物心ついたときから、ディズニーのことが大好きでした。

「パパ、いつか絶対ディズニーにランド連れてってね」と毎日のように言っていました。

私はそうだね、行こうねと答えながら、でももしかしたら約束を果たせないかもしれないと思っていました。

命は、あと数日で終わってしまうかもしれない。だからせめて今のうちに喜ばせてあげたいと思い、無理を承知でディズニーランドへ連れて行きました。

その息子が、ずっと夢にまで見ていた大切なサイン帳を落としてしまったのです。息子の落ち込みようは見ていて苦しくなるほどでした。

しかし、あなたが用意してくださったサイン帳を渡したときの息子の顔が忘れられません。「あったんだね！ パパありがとね！」と本当に、本当に幸せそうな顔でした。

ほんの数日前、息子はこの世を去りました。

ずっと、サイン帳をながめていました。

「ディズニーランド楽しかったね。また行こうね」と言い続けていました。

眠りにつくときも、サイン帳を抱えたままでした。

もしあなたがあの時、サイン帳を用意してくださらなかったら、息子はあるにも安らかな眠りにはつけなかったと思います。

息子はディズニーランドの星になったと思っています。

あなたのおかげです。

本当にありがとうございました。

\*

その手紙を読んだキャストは、その場で泣き崩れたと言います。

\*

☆落し物を一生懸命探してあげた。それでも見つからなかった。だから「申し訳ございません。一生懸命探したのですが、見つけることができませんでした」という謝罪をすれば、それで十分だとふつうは考えます。ゲストも納得するでしょうし、誰も責めることはないと思います。

でもこのキャストは、自分にできることは何か？と考えた。

ゲストの家族の深い事情なんて知りようがない。ただいつ、どんなときでも、誰かに尽くそうという気持ちだけが合ったんです。その気持ちが亡くなった男の子とそこそ両親をどれだけ救ったことでしょうか。

## ■帰りぎわ

その日はすごく空いていました。

夜になって、アトラクションにもあらかた乗ったから、そろそろ帰ろうかと彼女と話していました。ぶらぶら帰りながら飲もうと思って、特設ステージのわきにあるブースでジュースを買って、そこのキャストに声をかけた時のことです。

「出口ってどっちですか？」

当時、俺はあんまりディズニーに来たことがなかったから、いまいち方向感覚がつかめてなかったんです。

するとそのキャストは自分の時計を見ながら言いました。

「もう、お帰りですか？」

「…はあ」

「お急ぎでしょうか？」

「べつに、急ぎじゃないけど」

正直、余計なお世話だと思いました。客が聞いているんだから、さっさと教えるよってイラつきました。

「では、今日一日のことを思い出してはいただけませんか？」

なんだよ一体！ うぜーと思わず言いそうになりながら、キャストが「どうぞあちらを」と指し示す方向に目を向けると、その瞬間、ポンという音が鳴り、花火が打ち上がったんです。それはでっかくてきれいな花火でした。俺たちは飲み物を受け取るのも忘れて、その光景をぼう然と眺めてしまいました。花火

があるなんてまったく知らなかったです。

花火が終わって我に返ると、キャストが笑顔で言いました。

「ひとつ、思い出を加えていただけましたか？」

そして出口の方へ親切に案内してくれました。

素敵な演出に感動しました。

☆

## ■写真

そのとき私は、お城の前でステージショーを見ようと座って待っていました。ふと隣にいる人から「ディズニーランドはクリスマスが素敵だねえ」と声をかけられました。カメラをかまえた70歳くらいの男性でした。私が元気よく「そうですね！」と答えると、その人はこんな話を聞かせてくれました。

「以前はそれほどディズニーランドに興味はなかったんです。でもうちの奥さんが大好きでね。特にこのショーがすごく好きで、いつもいっぱい写真を撮って帰ってきたんです。よく撮れたやつは家に飾ってあります。いつか奥さんにどうしてもって言われてここにきたら僕もすっかり好きになっちゃって…。二人で年間パスポートも買っちゃいましたよ。そうしたら、奥さんガンで死んじゃってね。でもチケットがもったいなかったなあって、こうして毎日一人で来てるわけですよ。僕の方はちっとも写真うまくないんだけどねえ」

その人は笑顔で話していましたが、私は涙をこらえるのに必死でした。もしも今日うまく撮れたら、御仏前に飾ってあげてください。そう心の中で思いました。

☆

## ■お子様ランチ

数年ぶりに主人とディズニーランドに遊びに行きました。

この日は、1年前に亡くした娘の誕生日であり命日でした。からだがとても弱くて、生まれて間もなくこの世を去ってしまったのです。

主人とずいぶん長い間、深い悲しみにくれました。助けてあげられなかったこと、なにひとつ我が子にしてあげられなかったことがいまでも悔やみきれません。

「子どもが生まれたら、ディズニーランドに連れてきたい」という夢を果たすこともできませんでした。そこで主人と話し、供養のために訪れたのです。

事前にガイドブックを見て、かわいいお子様ランチがあることを知りました。それを娘にぜひ食べさせてあげたいと思い、ワールドバザールにあるイーストサイド・カフェに入ったのです。

本当は8歳以下じゃないと注文できないメニューです。でもお店の人に事情を話すと、こころよく注文を受けてくださいました。隣にあった4人掛けのテーブルに、子ども用の椅子を用意して「3名様、こちらへどうぞ」と席を移していただきました。

「本日はよく来てくださいました。ご家族で楽しんでいってください」

その人はまるで我が子がここにいるように、私たちをもてなしてくださいました。

私は感激で胸がいっぱいになり、その場で涙があふれてしまいました。おそらく主人も同じ気持ちだったと思います。これで娘がいたらどんなに幸せだっただろう。

お店の方々にとっても親切にさせていただいて、かわいいお子様ランチも食べられて、娘もさぞ喜んでいただろうと思います。本当にありがとうございました。あのときのお礼をどうしても言いたくて手紙を書きました。

娘は天国にいつてしまったけれど、これからも愛し続けて、一生一緒に生きていこうと思います。また娘を連れて、そちらへ遊びに行きたいです。

\*

☆キャストにとってこのような行為は規則違反です。でも先輩も同僚もとがめません。それどころかディズニーランドにおいては賞賛されるのです。マニュアルは基本でしかない。基本を超えたところに感動が潜んでいる、と知っているからです。

## ■喜寿のお祝い

私は今年で 77 歳、いわゆる喜寿を迎えた老人です。

末っ子が浦安におりまして、喜寿のお祝いになにか、と希望を聞かれたのです。

そんな折、すぐ隣に住む親戚で、私と同年代の年寄りが「まだディズニーランドに行ったことがない」言うもので、二泊三日をかけて浦安に出向くことにしました。

初日、駐車場から入り口までずいぶん遠く感じられて、中に入ればいっぱいの人、人、人でこれは、たいへんだと少し不安になりました。

ピーターパン空の旅では長い行列に並びました。1 時間近くかかってやっと自分の番がきましたが、どこを見回しても私たちのような年寄りには目につきません。「動いている機械に乗り降りするんだから、足下に気をつけてね」と我が子に注意されて、ますますこれは無理なところに来たと思いました。

ところが乗るとき、係の女性が動いている席をひとつ空のまま先送りし、次の席を停車状態にして乗せてくださったのです。これなら私にも安心して乗れる。とてもありがたかったです。そして空中遊泳気分ですべて降りるときも、別の係の人が手を添えてゆっくりおろしていただきました。そして「足下にお気をつけて。ありがとうございます」と送り出してくださいました。お礼は私たちが申し上げなければなりませんのに、嬉しゅうございました。

しかし本当に楽しかった。チリひとつ落ちていない清潔な場内にとにかく驚きましたし、素敵な白いお船に乗ったり、懐かしい汽車に揺られたり、小鳥の歌の世界に吸い込まれたり、目の前まで迫ってくる映像に目を閉じたり、ぬいぐるみやお菓子をお買い物したり。

パレードのときのことで。立派な男性が 7、8 人くらいのグループで、すっきりしたスタイルで踊りながら進んでこられました。そのうちのお一人が、私の前を通り過ぎたと思えば、引き返して両手で私の手をぎゅっと握ってくれました。ようこそ、こんにちとはとニコニコしながらおっしゃったのです。私はありがとうございます、ありがとうございます、と申しあげましたが、これが残り少ない人生の良い思い出となり、非常に胸に焼き付きました。

係の方々全員が、高齢の私たちに温かく接して下さり、来て良かったと思う気分にならせてくれたことをお礼申し上げます。人と人との触れ合いの尊さ、

ありがたさを実感しております。これからも若い人はもちろん、長い人生をしめくくろうとする年輩者にも、どうか楽しい夢と喜びを分けてください。

☆

## ■シンデレラ

私は関西に住むOLです。何度も東京ディズニーランドに来ています。

アトラクションはすべて乗り尽くしましたが、一つだけ乗り残したアトラクションがありました。それはシンデレラのゴールデンカルーセル（現キャッスルカルーセル）です。メリーゴーランドなんてどこの遊園地にもあるし、いつも小さい子が長蛇の列になっているし、一人で乗るのも恥ずかしかったです。だからいつか雨が降った日にでも乗ろうと思っていました。

梅雨の時期、たまたま東京に出張で来た帰りのことでした。前夜からずっと雨が降っていたもので、思い切ってディズニーランドに行ってみました。

雨のパークを突っ切って、ゴールデンカルーセルの前へ。思ったとおり、今日は誰も並んでいない。しめた。夢が果たせると思い、白馬の前までやってきたとき、うっかりその日、自分がタイトスカートをはいていることに気づきました。

またごうにも足が上がらないのです。あきらめて引き返そうとしました。すると近くにいたキャストが「どうぞ」と言いました。彼は白馬の前で、片方のひざを地面につけたのです。

でも雨で靴がぬれていたもので、汚れますからと断りました。

「いえ、洗えば落ちますから」

私は自分の顔が赤らむのを感じながら、添えてくれた手を取り、ひざをお借りしました。

まるで王子様のような心づかいがとてもうれしかった。

☆

## ■最高の一日

娘がどうしてもとせがむので、二歳のときに行ったディズニーランドの写真を見せました。二歳のときの記憶が残っているものなのか、ただ見つめるばかりです。ただその目は「もう一度行きたい」と訴えていました。

担当医に相談すると、うーんと言われました。

「危険ですね。とはいえ、ベッドの上で死期を待つだけというのも可哀想ですが」

そして判断は結局、私たちにゆだねられました。一晩よく考えました。途中で亡くなることも覚悟の上でした。

押し寄せるガン末期特有の痛みを、モルヒネの力で抑えつけるわけです。そんな状況で一体どうなるのか不安でしたが、あのおだやかな顔、痛みを忘れさせてくれたミッキーマウス・レビュー、シンデレラ城、そして最後の光のパレード…娘はたいせつな一日を過ごすことができました。

帰りは渋滞に巻き込まれることもなく、無事に病院に戻ってくることができました。そして「ミーちゃんおかえり！」という大合唱の中、病院中の看護婦さんと先生が出迎えてくれました。

この出来事があったおかげか、娘はその日から1カ月以上も生きることができました。自分の目で選んだおみやげと、ディズニーランドの思い出を胸に永眠したのです。迫力のあるアトラクションや、素晴らしい色彩のファンタジーはどれも素晴らしいものでしたが、キャストの皆さまの温かいおもてなしはそれ以上の贈り物でした。

駐車場まで送ってくださったキャストが「またディズニーランドに来てくださいね」と娘に声をかけてくれたとき、私が「じつはこの子は…」と言いかけると「事情は聞いております。でも私たちはぜひまた、お嬢様がディズニーランドに来ていただけることを心より願っております」と笑顔で見送ってくれました。

ディズニーランドは夢を与えてくれるところだと聞きます。でもそれ以上に、すてきなものをたくさんくれました。今、お骨の横には娘の形見であるミニちゃんの腕輪が並んでいます。それを見るたびに、あの日ディズニーランドで過ごした幸せなひとときがいつも鮮明によみがえります。

☆

## ■ミッキーのお友だち

娘にとっては初めてのディズニーランドだったので、前の晩からすこし興奮気味だったようです。ところが当日はあいにくの雨。中止も考えたのですが、娘がどうしてもミッキーに会いたいというので、雨具持参で行くことにしました。

雨のディズニーランドは私にとっても初体験でした。パレードやショーを見られずに、娘にはかえって残念な思いをさせてしまうのではと心配していました。

はじめはいくつか乗り物に乗って、娘もキャーキャーはしゃいでいました。ですが、やはり雨のせいか途中でグズりはじめてきたのです。

「やっぱり中止にしておけばよかった」と悔やみました。娘がグズると私までイライラしてきます。仕方なく少し休憩をしようと、近くのお店に立ち寄ったときのことでした。

空いている席を探しにいくと、「こんにちは」と笑顔のお姉さんが話しかけてきました。聞けば、席の先取りは遠慮してもらっているとのこと。私はムツとして「じゃあ、子どもだけ屋根のあるところで待たせてもらっていいですか」と娘をその場において、一人で食べ物を買って行ってしまうました。

ところが食べ物を買って娘のところに戻ると、さっきまでずっとグズっていた娘がニコニコしながらお姉さんと話をしているのです。「じゃあね、お姉ちゃん」と元気よく手を振る姿を見て、さきほどの自分の態度が恥ずかしくなりました。

「あのお姉ちゃん、ミッキーとお友達なんだって。今日は雨だから、ミッキーお家の中にいるって。行こうよママ」

雨の日でイライラしているのはみんな同じなのに、笑顔で頑張っている人に対して私はなんてひどい言い方をしてしまったんだろうと深く反省しました。本当に申し訳ございませんでした。

「パレードはね、雨が降ってるとミッキーたちがお風邪を引いちゃうから、お家でお休みなんだって。はやく晴れてほしいね」と娘はワクワクした様子で話してくれました。

食事を終えてトゥーンタウンに行き、1時間ほど待って、やっとミッキーに会えたときの娘の笑顔は忘れられません。

「お姉ちゃんの言うとおりでね。ミッキーお家にいたね」と何度も繰り返し言う姿を見て、心の中に温かいものがこみ上げました。

「ミッキーに会ってきたよーって、お姉ちゃんに言いにくいかな」

しかしまたお店に戻ってきたときには、もうそのお姉さんはいらっしやらず、むしろ私の方ががっかりしたくらいでした。

「ママ、お姉さんはきっとミッキーと遊びに行ったんだよ！」

☆

## ■指輪

私ははめていた指輪をもて遊んでいて、うっかり落としてしまいました。

落とした場所が悪かったんです。そこは地面よりも少し高い床が続くテラスで、指輪は板と板のすきまに入りこんでしまいました。がんばって取ろうとしましたが、奥に入り込んでしまいどうにもなりませんでした。

両親にもういいからあきらめろと言われ、後ろ髪を引かれる思いでその場を去ろうとしたとき、様子に気づいたひとりのキャストが「どうしました？」と近づいてきました。事情を説明すると、うーんと考え込んだ様子でした。そしてしばらくしてから「指輪は必ずお手元に届けます」と言ってくれました。

「ただ、今すぐ取って差し上げることはできません。この床はすべてそのまま店内までつながっているのだから、板を途中で切ってしまうといけません。それができるまで、どうかお待ちください」

そう言うだけでさるだけでも十分嬉しかった。私は「いえ。安物ですからけっこうです」とお断りしました。床を壊すなんてとんでもない。もうこれ以上、ご迷惑をかけたくなかったんです。しかしキャストは言いました。

「ここはディズニーランドです。困ったお客様を放っておくわけにはまいりません」

「でも…本当に安くて古いものなんですよ」

「大切な指輪なんじゃない？」

そんなことはひと言も言わなかった。恥ずかしさもありましたが、嬉しくて泣いてしまいました。指輪は、私が生まれてはじめて両親からもらったものだからです。

「必ずお手元にお届けします。ですからあきらめたり泣いたりする必要はございません」

三週間後に、ディズニーランドから「指輪が見つかりましたのでお送りします」という電話がありました。その翌日には本当に指輪が戻ってきました。しかもきちんとぴかぴかに磨かれていて、私の指を飾ったとき、それは以前よりも貴重なものを感じられました。本当のディズニーランドの良さを知った出来事でした。

☆

## ■勇者のメダル

私がキャストとしてデビューして半年ほど。

シンデレラ城ミステリーツアーで勤務していた時のことです。その日、養護学校の生徒さん5、6名がツアーに参加していました。私はすこし不安を感じていました。「大丈夫かな…。怖がって途中で出ていってしまうんじゃないかな」と心の中で思っていました。生徒さんたちはみんな、私の後ろをおっかなびっくりついてきているという感じでした。

ツアーの途中、私が魔法の鏡にいる魔女とやり取りしているとき、生徒さんの一人が私に話しかけてきました。

「ねえお姉ちゃん、あいつ悪いやつなの？」顔は真剣そのものです。

「うん。あいつは悪いやつで、お姉ちゃんのことをいじめるの！」

そう答えると、いままで私の背中に隠れるように歩いていた生徒さんたちが、突然私のまわりを取り囲みました。

「どうしたの？」

全員、私の目を見つめていました。

「僕たちがお姉ちゃんを守ってあげる」

それから私の手を握りしめて、一緒に歩いてくれました。

そしていよいよ最後の部屋で悪の大王と戦うときです。勇者ひとりを選ばなければなりません。「どなたか私と一緒に悪の大王と戦ってください！」

養護学校の生徒さんが、ずっと小さな手を挙げてくれました。

「大丈夫？ 本当にお姉ちゃんと戦ってくれるの？」

「こわい」

「がんばれる？」

「がんばる」

彼は勇気を出して戦ってくれました。“勇者のメダル”はもちろん、彼の首にかけてあげました。そのときの笑顔が忘れられません。

ツアーが終わって、お城の下でみなさんをお見送りしていると、おばあさんが私の手を取り、強く握りしめました。

「ありがとうございます。あの子のあんなに誇らしそうな顔は見たことがない。連れてきてあげて本当に良かった」

泣いているおばあさん顔を見ながら、私はうれしくて、この仕事をしていて本当に良かったと心の底から思いました。

☆

## ■おばあちゃん

うちのおばあちゃんは83歳です。

ディズニーランドはオープンのときに行ったきり。ディズニーシーには行かなかったが、一度行ってみたいということでした。そこで1st.アニバーサリーのタイミングにおばあちゃんと二人で行くことにしました。

園内では少し気をつかいました。おばあちゃんのペースに合うように、なおかつおばあちゃんが楽しめるものと思い、レールウェイやスチーマーラインに乗って景色を楽しんだり、アンコールやマーメイド、ミスティック、マジックランプシアターといったショーを見たり、とてもゆったりとした雰囲気でもごしました。

ところが、先にバテたのは私の方でした。

じつは風邪が治ったばかり。4日間寝たきりだった体が思うように動いてくれなかったのです。

「いいから、椅子に足を投げ出しなさい」

キャラメルナッツのアイスを売っているお店の中で、おばあちゃんが言いました。私は「恥ずかしいからいいよ」と断りましたが、おばあちゃんは私の足

を取り、ひざを優しくさすってくれました。

悪いやら、照れくさいやらでお礼を言うこともできず、シーシンフォニーが始まるまでの間、海と夜景をながめながら、二人でぼつぼつと話をしていました。

いつも彼氏という場所に、おばあちゃんというなんて不思議だなと思いました。おばあちゃんは楽しそうに、私がまだ小さかったころの話ばかりしています。

やがてシーシンフォニーが始まると、私はすぐに水と光の織りなす壮大なショーに夢中になりました。ミッキーのふる指揮棒に合わせて、水柱が上がり、花火がうちあがり、そのたびに大きな歓声が聞こえてきます。そしてたいまつが現れたとき、話しかけようと思って横を見たら、おばあちゃんが泣いていました。

「どうしたの？ ねえ、なに？」驚いて聞きました。

おばあちゃんはこちらを向いて答えました。

「ごめん。ごめんなさいね。今日は本当にありがとね。あっちゃんと一緒にいられて本当に楽しかった。こんなに素敵なものを見せてもらって、おばあちゃん、幸せだよ」

私はなにか喋ろうと思ったけど、口を開いたら絶対に泣くと思ったので、あわてて唇を噛みショーの方を見ました。

そして「また来ようよ」とだけ答えました。

帰りの新幹線の中で、この先も1年ごとにディズニーに行こうねと約束をしました。今度は家族みんなで行きたいなと思います。

☆

## ■最後の業務

以前、クイーオブハートのレストランで働いていました。

そして辞める日の最後は、外に立つポジションにつかせてもらいました。

ちょうど花火の時間帯です。ぼくは花火が上がる方角に対して、背を向けていなければいけません。

だからぼくに見えるのは、花火を鑑賞しているゲストたちの顔でした。家族連れ、カップル、友だち同士…みんな花火が打ち上がるたびに、さまざまな笑顔を見せてくれます。大はしゃぎする人もいれば、ひっそりと微笑み合う人もいます。指をさしてなにかを話している人もいます。

はっと思いました。これはなんなんだろう。一体なんという数の笑顔なんだ…と気づいたら、急に胸に熱いものがこみあげました。これだけ多くの人たちを、いっぺんに喜ばせてしまうなんて。こんなすごい場所で今までお手伝いできて良かったなと思い、ぼくは涙ぐんでしまいました。

☆

## ■父子

約束の時間ぎりぎり、舞浜駅のホームから階段を下りると、雑踏の中に元妻と小さいリュックを背負った小3の息子がいました。

半年ほど見ないうちに、ひと回り大きくなった。息子をじっと見ていると、元妻は「じゃあお願いね」とパスポートとメモを寄こしてきました。

元妻に見送られながら、私と息子は改札を出ました。メモには息子が好きなアトラクションと店、食べ物が記されています。ディズニーランドに着くまでの道のりは、二人ともずっと無言でした。

いろいろ話したいことがありました。普通の親子がするように息子の頭をなでたりもしたかった。でもきっかけがつかめない。そのままインパークしました。

アトラクションに乗るうちに少しずつ会話が増えましたが、お互いに気をつけている感じは隠せなかった。キャストからお父さんと呼びかけられて、不思議な気分にもなりました。

長いようで短い、8時間でした。

夕闇が迫る駅のホームで待つ元妻に、息子を引き渡し、彼女の希望で私は一本あとの電車に乗ることになりました。二人を見送り、電車のドアが閉まります。

すると突然息子が大声で叫びました。

「おとうさん！ 次はシーだよ！ 絶対一緒に行こう！」

おとうさんという言葉聞いたのは、その日初めてのことでした。

一人で電車で揺られながら。スプラッシュで撮られた写真、おんなじように口を開けて馬鹿面で喜んでいるの二人の顔を見ていたら、なんだか泣けてきてしまいました。

☆

## ■友人

事故で片足が不自由になってしまった友人と、ディズニーランドへ行きました。

リハビリをがんばったお祝いに、みんなで集めたお金で年間パスポートをプレゼントしたのです。

30分おきくらいに休みを取りながら遊んでいたら、次第に混んできて、ベンチが家族連れで埋まってしまいました。どうしようと迷っていたら一組の家族が友人の足に気づいて場所を譲ってくれた。するとその家族の一人、幼稚園くらいの女の子がこう言ってきたんです。

「お姉ちゃん、足痛いの？」

私はとっさに、やばい！ 変なこと聞かないで、せっかく楽しんでたのにと  
思い、その家族もあわてた雰囲気になりました。

そんな中、友人は言いました。

「お姉ちゃんは、車にひかれちゃったの。上手に歩けないんだ。車には絶対  
気をつけるんだよ。いっぱい走れなくなっちゃうからね」

にこにこしている友人を見て、私はさっきまでの自分の考えたことが恥ずか  
しくなりました。

「うん、気をつける！ お姉ちゃんの分までいっぱい走る！」

女の子は手を振りながら、元気よく去っていきました。

それまで友人に気がつかっていたけど、この出来事のあと、いままでのよう  
に自然に接することができました。

☆

## ■新人キャスト

レストランにキャストイングされて、トレーニング2日目のことでした。

トレーナーが付き添っているとはいえ、ゲストの前でお話したりご案内をするのは、心臓が飛び出そうなほど緊張しました。自分がなにをしているのか、なにを話しているのかも分からないくらいです。

その日最後のゲストはカップルの方でした。お二人ともとてもノリが良く、たくさんおしゃべりしてくださいました。私もつられていっぱいおしゃべりしてしまい、パークに関するご質問にもがんばってお答えいたしました。

しかし最後の最後に不安になってしまい、ついこんなことを申し上げてしまいました。

「このたびはご案内に手間取って大変申し訳ございません。このあとこちらのテーブルを担当させていただくキャストは、わたくしと違ってベテランでございますので、どうぞご安心くださいませ」

自分が新人だということをゲストにお伝えするのはルール違反です。言ってしまったあと、自己嫌悪に陥ってしまいました。

「うん。全然そんなことないですよ。担当がAさん（私の名前）で良かった、ね？」

「うん。私、キャストとこんなにお話できたの初めて。すっごい楽しかった！Aさん、これからもがんばってくださいね」

私はおじぎをして、バックステージへ逃げるように引っ込みました。涙をこらえるのが大変でした。トレーニングがとてもきつくて、自分にはこんなことはできないとずっと不安で不安で、だから最後のゲストをご案内したらもう、社員の方に「辞めます」とお伝えしようと考えていたのです。

それなのにあのゲストは私の名札を見て、ちゃんと名前を呼んでくださった。帰り際にわざわざ私のところへ挨拶しにきてくださった。キャストってこんなにすごい体験ができるんだって驚きました。あのゲストがいなかったら、きっとあのとき辞めていたと思います。あのゲストのおかげで、今では「つらいこと」よりも「うれしいこと」を見つけられるようになりました。本当にありがとうございました。

☆

## ■父との思い出

父は私が中2のときに亡くなりました。

昔、手術を受けたときに輸血でC型肝炎に感染し、そして肝硬変になったのです。

父が危篤になり、母は泣きながら言っていました。

「あなたのお父さんは、他のお父さんより早くいなくなってしまうかもしれない。けど、それはただ一緒にいる時間が短いだけなの。あなたのことが大好きだから、あなたと色々な思い出を残したかったのよ」

うちの家族がなぜ旅行ばかりするのか、そのとき初めて知ったような気がします。

旅行先の中でも、父が特に気に入っていたのはディズニーランドでした。

あるときたずねたことがあります。

「どうしてうちはずっと、旅行って言うとディズニーランドなの？」

すると父は笑いながら言いました。

「嫌なことを全部忘れられるからだ」

私には当時、その言葉の意味がわかりませんでした。それよりも父と徐々に一日中過ごせることが嬉しくて、ただはしゃぎ回っていました。

でも帰るころになると、私の心は真っ暗になりました。嫌なことがあったわけではありません。むしろ楽しすぎて、急に不安になったのです。父とこれから一体、どれくらい旅行にこれるのだろう。同じ時間を過ごせるのだろう。

「どうしたの？」

急に泣き出した私に、母が聞いてきました。

お父さんが死ぬのが怖い、という言葉は引っ込めました。言えばすぐに現実になりそうだったからです。

「お父さんがまた病院に帰ってしまうのがさびしい」と答えました。

あるときから、父は体力を失いはじめました。

病状が悪化したときのことを考え、旅行も病院から二時間以内のところに限られました。残念ながらもディズニーランドには行けません。

母は病院に泊まり込むようになり、私は親戚の家に預けられました。

そんな中、父は25年の闘病生活の中で三度、危篤状態になり、三度、奇跡的

に回復しました。

しかし、四度目の奇跡はありませんでした。

一年間の喪が明けたとき、私は母とディズニーランドへ行きました。

父と一緒にいないディズニーランドは初めてです。父がいないのに、楽しい気持ちになれるかな…。そんな不安は、ゲートをくぐったとたんすぐなくなりました。ディズニーランドは父がいた頃となんにも変わらなかった。いつものように私たちを温かく迎え入れてくれました。

景色に匂い、音楽や流れる空気、いたるところに父との思い出が染みついていた。これお父さんと一緒に乗ったな。お父さん、これ好きだったな。お父さんここであんな話をしてくれたな。ふだんは思い出せなかった、父の笑顔や声が鮮やかによみがえりました。

「またここに来ようね」母と約束をしました。

☆

## ■決意

ぼくがまだ小学校低学年だったころのことです。

ハングリーベアレストランで飲み物買ったあと、席が空いたのでダッシュしたら転んでしまいました。

しかもその先には女性のキャストがいて思いっきりぶつかり、お互いに飲み物がかかってしまいました。どうすればいいのか困っていたら、そのキャストは「お洋服大丈夫ですか？　すぐに新しいお飲み物をお持ちしますね」と言いながらぼくの服を丁寧にふいてくれました。服を汚してしまったことを謝ろうとすると、「どうかお気になさらずに」と言ってくれました。

「ただひとつだけお願いします」

「なんですか？」

「このことをさっぱり忘れて今日一日、思いっきり楽しんでください」

その言葉と、笑顔は、深く胸に残りました。初恋だったのかもしれませんが。

あれ以来、ディズニーランドに強いあこがれを持ち、すこしでも早くキャス

トになりたくて、いまは大学受験の猛勉強中です。いつか、もしもキャストになれたら、ぼくもこういう温かい気持ちでゲストたちをお迎えできればと思っています。

☆

■

私は双子を産み、一人を幼いときに病気で亡くしています。

以前、ディズニーランドに行ったとき、娘がバースデーシールを貼っている子を見つけました。バースデーシールとは、誕生日の人に配布されるシールです。シールを目立つ所に貼っていると、どこに行ってもキャストがお祝いしてくれます。

前の日が誕生日だった娘は、ずうずうしくもキャストさんに「昨日誕生日だったんだけど、シールもらえますか？」と聞きました。するとキャストさんは「もちろんです。お誕生日おめでとう！」と貼ってくれました。それだけでもありがたいのに、娘はこんなことを言いました。

「お姉ちゃんの分ももらえますか？」

「同じお誕生日なの？」

うんとうなずきました。「でもおうちにいるの」家にお骨があったからです。

「いいよ。お姉ちゃんの名前は？」

私と夫が何も言えないでいたので、キャストさんはなにかを感じとってくれたのでしょうか。

「大事に持って行ってね。必ずお姉ちゃんに渡してあげてね」

と言って、ニモのシールをくれました。

シールは今も大切に飾ってあります。あのときのキャストさん、どうもありがとうございました。

☆

■ミッキーとミニー

ちょっとした人だかりの中、ミニーちゃんが人をかきわけて、一直線に突き

進んでいました。まわりのゲストたちはきょとんとしていましたが、その先には白い杖を持った人がいました。目が見えない方らしいんだけど、ミニーは一生懸命グリ（グリーティングのこと。キャラクターと挨拶したり写真を撮ったりする）していました。

相手の手を優しくにぎって、その人の鼻を触って、その手をゆっくりそのまま自分の鼻のところに持っていきました。「これがミニーちゃんの鼻ですよ」とキャストさんが隣で説明をしてくれました。鼻、目、口、耳、ひとつおひとつもらったあと、ミニーちゃんはそのゲストをぎゅーっと抱きしめていました。すごく嬉しそうでした。そして一緒にいる付き添いの人に対しても、＜がんばってね＞というジェスチャーをして元気づけていました。誰もグリに割って入るようなことはしません。ミニーちゃんのおかげで、まわりのゲストもすごく幸せそうな顔をしていました。

\*

雪でパレードが中止になり、でもどうしてもミッキーに会いたかったのでミートミッキーに行きました。

服や髪の毛、靴がびしょびしょで、寒くて震えながら並び、やっとミッキーのいる部屋にたどりつきました。ミッキーは私を見ると、あわてた様子で服や体についた雪を払ってくれました。そして＜寒い中わざわざありがとうございます＞というしぐさをして優しく手を差し出してくれました。

嬉しかったけど、ミッキーの衣装が汚れちゃうから、写真を撮るときは手をつないで撮ろうねと伝えたんですが、ミッキーは＜大丈夫、気にしない＞というしぐさをして、優しく肩を抱いてくれました。ハグをしてチューをしてくれました。冷え切った手を両手でぎゅーっと暖めてくれました。別れするとき、ミッキーはドアまでエスコートしてくれました。とても幸せな数分間を過ごすことができました。すごくうれしくて、ミッキーの家を出てからしばらく涙が止まりませんでした。ありがとうミッキー。前よりもっと大好きになりました。

☆

## ■迷子

10年以上前、私がキャストをしていた時のことです。夕方ごろに、泣いている女の子を見つけました。すぐに迷子センターに連絡しましたが、ご両親らしき方はいらっしゃっていないとのことで困ってしまいました。というのも、この日は欠勤者がいて、特にその時間帯はぎりぎりのローテーションで回っていたからです。結局、チケット係の私が女の子をお預かりすることになりました。

「お母さん見つからなかったらどうしよう？」と不安がっている女の子。私は大丈夫、絶対見つかるよと何度もはげますんですが、一向に泣き止んでくれません。

よし、じゃあわかった。弱り果てた私はついこんなことを口走ってしまいました。

「見つからなかったら、お姉ちゃんと一緒にここに住もう！」

「ホントに？」

「ここは楽しいよ」

「シンデレラ城のベッドで寝てもいいの？」

「いいよー」

「毎日ミッキーと遊べるの？」

「もちろん！」

すると女の子は泣くことも忘れて、あれこれ空想ををはじめました。寒い日だったので、女の子を私のコートでつつんであげました。

1時間ほど待ったころ、お母さんが見つかったとの連絡が入り、女の子を迷子センターへ連れていきました。ほとんどの迷子さんは、両親を見ると安堵してワーッと泣き出して、駆け足で抱きつくものです。そのときお姉さんの存在は急にどうでもよくなります。

ところがその子はお母さんを見るなり、私にしがみついて叫びました。

「やだ！ 帰らない！ お姉ちゃんとここに住むの！」

苦笑いするお母さんの胸に、私は女の子をそっと手渡しました。

「お母さんとお父さんが、すごくさびしがっちゃうから。お姉ちゃんはいつでも待ってるから、またここに遊びにおいでよ」

別れ際、バザールにある大きなツリーの前で、迷子の記念と一緒に写真を撮

りました。「きっとだよ！　また絶対に会おうね」女の子は何度も振り返り、バイバイ、バイバイと手をふりながら帰っていきました。いまごろすっかり大きくなっているだろうけど、この日の出来事を覚えていてくれたらいいな。

☆

## ■大きな白い温かい手

二度の脳梗塞によって重い障害が残った夫は、発作を繰り返しながら自宅療養を続けています。ときどき人との接触を求めて、外出をします。

冬のある日、急に思い立ってどこかの遊園地へ行くことにしました。

広場のすみに車椅子を止めて、私はそばに付き添い、元気よく走り回る子どもたちを眺めていました。思ったよりも寒くて、早く帰らなければと思いました。

広場に歓声があがりました。ドナルドダックが現れて、子どもたちがどっと駆け寄ったのです。ところがドナルドは子どもたちをかき分けました。どンドン駆けて、こちらへ近づいてくる。すみっこにいる私たちの方へ。そして車椅子に乗った夫の前になると、大きく一礼をして大きな手で夫の背中をなでてくれました。二度、三度。

突然の出来事に、私たちもまわりの人たちも驚いていました。夫の背中をなでると、こんどは私の腕をさすり、両手で包み込んでくれます。

大きな白い温かい手で。優しさが老いた二人を包み、その温かさがまわりに広がり、見ていた人たちから拍手が起こりました。

夫の顔を見ると、涙がほろほろ頬を伝っています。風の冷たさを忘れました。「ありがとう」というのが精一杯です。ドナルドはうんうんとうなずいて、もう一度夫の背中をなでてから、子どもたちの方へ駆けていきました。

思いがけない出来事でした。顔は見えない。声も聞けない。でも優しさと、励ましの気持ちはしっかりといただきました。ありがとう。

☆

＝

青空とシンデレラ城。

その2つを遠くに見つけると、なぜかほっとして、それから少し泣きそうになる。

大げさだけど、感謝の気持ちと敬意を捧げたくなる。本当に。

もしも最期の日があるというなら、その日はいつまでもシンデレラ城を眺めていたい。きっとそこだけは最後の最後まで希望に満ち、輝いているはずだから。

## ■ 1枚のシート

カウントダウンの日。

パレードを待っているとき、学生っぽい女の子2人が窮屈そうにしているのに気づきました。レジャーシートを持っていない様子です。悪天候で地面がぬれていて腰はおろせません。小雨が降る中、しゃがんだ状態であと1時間は待たなきゃいけないのです。

寒さを予想していた私たちは、シートを数枚持ってきていました。重ねて使っていたので、1枚を引き抜いて、彼女たちによかったらどうぞと声をかけました。たったそれだけのことなのに、彼女たちの表情がぱあっと明るくなって、何度も何度も感謝されました。貸した側なのに、私の気持ちの方が温かくなったような気がします。

パレードが終了し、彼女たちから丁寧にたたまれたシートを返されるとき、なにかを差し出してきました。

「あの、何も持っていなくて。買ったものしかないんですけど、お礼をしたいので受け取ってください」

それはプーさんの携帯ストラップでした。きっと自分へのおみやげだったんでしょう。そんなつもりはなかったのでお気持ちだけと遠慮したのですが、「すごく助かったんです。本当に嬉しかったんです」と笑顔で言われて、思わず受け取ってしまいました。

すてきな思い出だったので、その携帯ストラップはまだ使わずにとってあります。ときどき眺めて、そのときのことを思い出し、心を温かくしています。

そしてそれ以来、パークへ行くときは必ず1枚余分にシートを持っていくようになりました。

たった1枚のシートのおかげで、いろんな人たちとの良い出会いがあります。とても素直に「ありがとうございます」「どういたしまして」という気持ちのいい言葉が交わされる幸せを感じています。

☆



ディズニーリゾートには障害者割引がありません。

障害を持つ人でも可能な限り十分に受け入れられる体制が整っている、という姿勢だからであり、健常者も障害者も同じく1人のゲストだと考えられているそうです。

先日、並ぶ列で“待つことができない”息子のために、ゲストアシスタントカードを使わせていただきました。

イツアスモールワールドでのことです。カードを見せて、建物の中に入ろうとした瞬間、外壁にあるからくり仕掛けが動き出しました。息子はその様子を見ていたらしく、微動だにしなくなってしまいました。意思疎通がはかれないので、行こうと話しかけてもまったく反応しません。

そんな様子に気づいたキャストさんが「見たいの？　じゃあ見てから行こうか！」と明るく話しかけてくれました。言葉が理解できない息子は、ただ同じ姿勢で仕掛けを眺めていました。

けれどあのとき、あの場で息子を建物の中にうながしていたら、たぶん息子はパニック状態になっていたでしょう。キャストさんは息子の特徴に合わせて案内してくれました。外には他のお客さんが大勢並んでいました。さっさと案内をして、次の業務に移りたかったはずだと思います。すくなくとも、知的障害について理解していなかった頃の私なら、そう考えるはずです。だから、あのキャストさんのなにげない言葉と行動は、できるようでできないことだと思うのです。

知的障害の子を持つ親にとって、バリアフリーとは「理解」だととらえています。いくらそういう関係の本を読んでも、対処法の講義を受けても、専門家

たちが話し合っても、「理解」してもらうのはなかなか難しい。みずからが障害者と接することで、経験していくしかないのです。理解は経験からのみ生まれるんだと、私は痛感しています。私は知的障害の子を持ちますが、同じ障害を持つ子でも、他の子は行動がまったく違うときがあります。本当に難しいんです。

でもディズニーの人が、こうして勉強してくれているんだと思うと、心強いし、なにより嬉しいです。うちの家からディズニーまではとても遠いし、お金もかかるのでめったにいけません。だから訪れたときには、心ゆくまで楽しませていただきたいと思います。

※ゲストアシスタントカード=介助サービスカードの総称。待ち時間なしでご案内するサービスは、2008年現在廃止されている。

☆

## ■落とした指輪

夫と初めてディズニーランドへ行った時のことです。

はしゃぎすぎたのでしょう。ジャングルクルーズを楽しんだあと、「結婚指輪がない」ことに気づいてしまいました。それまでの幸せが嘘のようにどこかへ行ってしまいました。

アトラクションのキャストさんにそのことを伝え、キャストさんは現場の責任者らしき方にそのことを報告してくれました。

見つかることを願い、楽しむことにしましたが、指輪を落としてしまったため、楽しむに楽しめませんでした。

数時間経って、ひとりのキャストに声をかけられました。その手にはなんと落とした結婚指輪があったのです。どうして？という思いでいっぱいでした。川の中に落としてしまっただろうから、見つかるはずはないと絶望していたのです。

報告を受けた責任者の方は、本部と相談した上で「全力で指輪を探す」という決断をしてくださったそうです。

しかしどこで落としてしまったか検討もつきません。そこで園内を巡回する

すべてのスタッフに連絡を取ってくれました。また川の中の捜索にはダイバーが飛び込みました。そしてもうひとつの重要な連絡は「私たち夫婦には、決して気づかれないこと」ということだったそうです。これ以上、お嫁さんに苦しい思いをさせてはいけなと。

大捜索のすえ、ダイバーがボートの通り道に沈む指輪を発見し、すぐさま私たちのところへ届けられました。

どうして？という思いでいっぱい、表現できないほど嬉しかったです。

☆

### ■ビッグサンダーマウンテン

この乗り物に乗りたくても乗れない人がいます。

それはどんな人たちでしょうか？

身長102センチ未満、3歳未満、乗り物に酔いやすい方、妊娠中の方、心臓・首・脊椎などに障害のある方。以上に該当する人の乗車をお断りするのがディズニーランドの決まりです。

ある日、ひとりのゲストがやってきて言いました。

「私はこれに乗りたくてわざわざやってきたんです。死ぬまでにせめて一度だけでも、ビッグサンダーマウンテンに乗りたい。あなたに迷惑はかけません。何が起きても私の責任だから、乗せてほしい」

そのゲストは車いすに乗っていました。でもキャストが一生懸命お断りしても頑としてあきらめようとしませんでした。

キャストは少し迷ってから、背中を向けました。

そのゲストを背負って長い階段をのぼりました。他のキャストには「自分がすべて責任を負う」と伝えました。ゲストを機体に乗せるときには、すり傷も負ってしまったそうです。

あなたが上司なら、そのキャストになんて言いますか？

☆

### ■ジャケット

大阪から泊りがけでディズニーランドにやってきました。

しかしその日はとても混んでいて、予定していたアトラクションの半分も行けそうにありませんでした。

そんな中、子どもたちがどうしても乗りたいというので、1時間待ちでしたが、空飛ぶダンボに乗ることにしました。ずいぶん長い間待ったような気がしますが、景色やパレードをみてなんとかやりすごし、ようやく自分たちの番がきてダンボに乗ろうとしたときのことです。私のジャケットがなにかに引っかかりました。そのことに気づかずに乗ろうとしたので、ポケットの部分が破けてしまいました。

するとその様子を見ていたキャストの方がすぐに飛んできました。

そして「あとでちょっとお話しを」とおっしゃいましたが、一体なんのことかわかりません。

ダンボから降りると、別のキャストの方がいらっしゃいました。そして深々と頭を下げました。どういことですかとたずねたら、私がポケットを破ったことで不快な思いをしたのではと謝りにこられたそうです。「かわりのジャケットをご用意させていただきたいと思います」

私と主人はびっくりして「いえ、こちらの不注意でやったことなので気にさせないでください」とあわててお断りしました。

「お客様はピーターパン空の旅へは行かれましたか？」

ダンボ以上の列だったからあきらめていたアトラクションです。すると早速、キャストの方にうながされ、ピーターパン空の旅に乗せていただきました。

思いがけないことでぼーっとしている間に、ついお言葉に甘えてしまいました。

おかげさまで子どもたちは大喜びではしゃいでいましたが、あとで考えれば、こちらのミスで起きたことなので遠慮すべきことだったと思います。

しかしこれが本当のディズニーランドの姿なんだと心の底から感動しました。大阪にもディズニーランドができたなら、どんなに幸せなことでしょう。自転車でディズニーに来ている人を見て、とてもうらやましく思いました。私たちの夢でもある年間パスポートを持ってらっしゃるのでしょうかね。

来年、引越しをして、6歳の息子は自分の部屋ができます。息子は壁紙やカーテン、自分の部屋のなにかもをミッキーでそろえたがっていて、我が家のちいさなディズニーランドになりそうです。3歳の娘もミッキー大好きで育っ

ているので、自分の部屋を持てるようになったころにはもうひとつディズニーランドができそうです。

キャストのみなさん、本当にすてきな日々を作ってくださいありがとうございます。

これからもたくさんの夢を与えてくれる場所でありますように。

☆

## ■同じだけの夢

脳性まひの妹を連れて、ディズニーランドへ行きました。

夏休みの土曜ということもあり大変な数のゲストがいる中、私と妻、子ども二人、そして車椅子の妹の5人でお昼から遊んでいました。

今回の一番の目的は、

妹にひと目だけでも「夜のきれいなパレードを見せてやりたい」ということでした。

しかし私自身がまだ2回目の来園だということもあって、ほかの慣れ親しんだ方々のようにパレードの場所取りの仕方も知らず、レジャーシートも持参せず、ただ人の波がパレードの通路脇を埋めていく様子をおろおろと目で追っているだけでした。

私たちは車椅子の人間を連れていて、ちょっとした空間に入れてもらうのも気が引けました。

だから空飛ぶダンボの後ろで、子どもたちとともに開始を待っていました。あまりよく見えないことは承知のうえでした。

場内放送が流れ、あとしばらくではじまりそうな雰囲気するとき、「こんばんは」と若い男の人から声をかけられました。

「車椅子ご利用のお連れ様と、ちいさなお子様がいらっしゃるのであれば、ここからでは非常にご覧になりにくいかと思います。まだ十分に間に合いますので、よろしければご覧になりやすい場所へご案内させていただきませんか？」

ニコニコしているその男の人の顔をぽかんと眺めました。ただ他の方々を押しつけてまでという気があったので「大変ありがたいのですが、他の方にご迷惑をかけてしまいますから」と丁重にお断りをしました。

するとその方はよりいっそうにこやかに言いました。

「ご心配はいりません。私たちはハンディキャップをお持ちのお客様や、小さいお子様にこそ、前の方でごらんになっていただけるよう、できるだけお力になりたいのです。ご足労をおかけしますが、よろしければこちらへどうぞ」

お城の裏側へまわり、私たちの足元を黄色いライトで照らしながら、私たちのゆっくりした歩調に合わせて、ロケットの見える大変見晴らしの良いスペースに案内してくださいました。場所は別の若い女性スタッフの方が、ご親切にとっておいてくださいました。

車椅子の妹がああ美しいパレードを間近で見ることができた。

妹のあんなに興奮した、輝いた目を見たのは何年ぶりかのことです。声をかけてもらわなかったら、あれほどのすばらしい体験はできませんでした。

お名前をおたずねしたのですが「ディズニーランドでは全員同じ対応をさせていただくと思います。特別なことをしたわけではありませんので、どうぞお気になさらないでください。たくさんのお客様に同じだけの夢を見ていただきたいだけですから」としかおっしゃいませんでした。

子どもが「お兄さんはなにをしている人？」とたずねたら「ディズニーランドのおまわりさん。困っている人を助ける仕事だよ」と答えてらっしゃったので、おそらくガードマンの方だと思います。ストライプのシャツにエンジ色と青のネクタイという姿でした。(ズボンは暗くて覚えていません)

「ディズニーランドの会社の方ですか？」私はたずねました。

「土曜と日曜に仕事をさせていただいている者で、社員ではありません。ディズニーランドが大好きなんです」

心からのおもてなしをくださったディズニーランドのおまわりさん、どうもありがとう。

☆

## ■説明

私たちのすぐ前に母子が並んでいました。

キャストが女の子の身長を測るというので、私たちは入り口で少し待たされました。そして女の子は難なく規定の身長をクリアし、喜びながら中に入って

いきました。

ところがしばらくすると、別のキャストがさっきの母子を追いかけてきました。必死になにかを説明していました。聞き耳を立てずとも、内容は聞こえてきます。つまりその女の子は安全のために乗せることはできない、ということでした。両腕がなかったからです。

キャストは丁寧に説明をしているんですが、お母さんはこらえきれずに泣き出してしまいました。涙を流しながら娘に「ごめんね、ごめんね」と何度も謝っています。そのうちに女の子の方も大声で泣き出してしまいました。私は「乗せてあげればいいのにな」と思いながらその光景をぼんやり眺めていましたが、よく見たらそのキャストも大泣きしていることに気づきました。なんだかこちらまで泣けてきてしまいました。

☆



最後にアメリカのディズニーランドでの優しい出来事をお伝えして、この本をしめくくりたいと思います。

女の子が泣いていたので、近くにいたキャストが「どうしたの？」と声をかけました。

「フック船長が怖いの」

そこにフック船長はいませんでした。彼の持つイメージが怖いのでしょう。そこでキャストは女の子のお母さんから、宿泊先と部屋番号、そして何時くらいにホテルに戻るのかをたずねました。

ホテルに戻った時のことです。

部屋に入り、テーブルの上を見ると、女の子に宛てた一通のお手紙が届いていました。

女の子は早速、お手紙を開けました。

\*

こんにちは！ Aちゃん。

どうやらフック船長が君のことをいじめたみたいだね。

ぼくがこらしめておいたから、もう安心だよ。

でもね、実はフック船長って

本当はすごく優しい人物なんだ！

だから次に会うときは怖がらなくていいよ。

ディズニーランドを楽しんでね！

ピーターパンより



アトラクションを動かしている方、おそうじの方、エスコートしてくださっている方、そのほかのすべての裏方の方々…いつでも、誰にでも笑顔を絶やさずお仕事を続けるのは大変だと思います。体調の悪いときや、悩んでいるときなど、本当につらいと思います。

でもそのおかげで、私たちはとても楽しくて、うれしくて、忘れられない思い出を作ることができました。どうもありがとうございます。これからもすばらしいディズニーランドでいられるようにがんばってください。



・ディズニーランドは「最高のもの」である。最高のものは、普通のものよりずっと良い事を教えてくれる。

・ディズニーランドは世界に冠する企業である。一方でお客様をもてなす方法、幸福感を味わっていただくノウハウについては超一流ホテル並だ。

・ディズニーランドには「すごいもの」ではなく「ありえないほどすごいもの」なのだという思い入れがある。

・ディズニーランドでは、誰もが尊敬に値する、刺激的で、意欲をかきたてられる仲間との最高レベルの競争に参加することになる。自分がどれだけできるかという、自分自身との戦いである。

・私がディズニーランドで働き続けられたのは、自分たちが本当に重要なもの、けたはずれに偉大なものの一部になっていると感じられたからである。

#### ■ ミッキーマウスの十戒

- ・ゲストのことを知る。
- ・ゲストと同じ靴をはく。
- ・誰かのアイデアと、この次の展開をつなげる。
- ・人の目をひきつけるものをつくる（奥まっているところにも）。
- ・目に見えるものだけで伝える。
- ・与えすぎることなく、ワクワクするものをつくる。
- ・ひとつのショーを、ひとつのストーリーで語る。
- ・矛盾をなくし、一貫性をつらぬく。
- ・あつかわず、もてなす。
- ・努力を維持し、質を維持する。

#### ■

病気が重く、余命半年だと告知された息子のために、これが最後のつもりで、家族みんなでディズニーランドを訪れました。

そのときゲストコントロールキャストの方の対応がすばらしかった。息子と一緒に踊ったり、好きなキャラクターの話をしたりしながら、とても一生懸命

に励ましてくださいました。

「私も楽しく仕事をするためにがんばっているけど、一人だとつまずいてばかりなんだよね。でも仲間がいるから。つらいことがあってもなんとか乗り越えられる。一人でがんばらなくてもいいんだよ。みんなで一緒に病気とたたかおうよ。それで、いつか私たちと一緒にここで働こうよ」

息子は真剣なまなざしでお話を聞いていました。

「お時間があったら、よかったらパレードも見ていってください」とすすめられて、私たちは夜まで待ち、エレクトリカルパレード・ドリームライツも鑑賞させていただきました。同じキャストの方が、私たち家族にこう言いました。

「パレードの一番最初にやってくる“ブルーフェアリー”は、ピノキオを人間にした妖精で、なんでも願いをかなえてくれます。さあブルーフェアリーがやってきました。早く病気が治って、パークで働けるようにみなでお祈りしましょう」

この日から息子が変わりました。将来パークで働くためにと、リハビリに取り組みはじめたのです。おかげさまで私たちも変わることができました。今まで息子にただがんばらせていただけでしたが、息子のやる気を導き出したり、はげましたり、一緒にがんばれることがたくさんあるんだと気づきました。

あのときのキャストの方の対応には、本当に心を打たれました。勇気づけられました。息子は今でもがんばっています。ぜひともこの感謝の気持ちをお伝えください。

※ゲストコントロールキャスト＝ショー、パレードでの案内・誘導係



私はシェフ・ミッキーで働いています。

そこはいろんなキャラクターが遊びにくるので、お子様に人気のレストランです。

以前ここへ、ひとりの女の子が遊びにきました。彼女の余命は半年だと、事前に聞かされていました。

女の子の夢は、大好きなミッキーたちに囲まれて、大好きなお父さんと結婚することでした。その夢を叶えるために、その日ここでお食事会を開いたので

す。

お父様はタキシード、女の子は可愛いドレス姿。とても楽しそうで、素敵なお二人でした。女の子は私にいろいろなお話をしてくれました。お店の中で起きたこと、お父さんと交わした会話のこと、そして大好きなミッキーとミニーのこと。そしてご両親に手を引かれながら帰るとき、くるっと私の方を振り返りました。

「またね」

そう言って、女の子はやさしい笑顔を見せてくれました。

病気と懸命に闘っている小さな子が「またね」と言ったのです。

私には言えませんでした。無責任な言葉だと思いこんでいたからです。でもそんなことは関係ないんだって、反対に彼女から教えられたような気がしました。私は涙をこらえて「またね。またきてね」と元気よく答えました。



主人が海底2万マイルのファストパスを取りに行きました。

主人は車いすを利用しており、混雑のため前に進めず困っていましたが、そこへすばやくキャストの方が駆け寄ってきて、かわりに券を出してくれました。

言葉を交わす中で、主人が「海底2万マイルの原作が大好きなんです」と話すと、そのキャストの方はミステリアスアイランドのバックグラウンドストーリーを話してくれたそうです。

主人は今度、手術を受けることになっています。その結果次第では、もう二度とディズニーシーへはこられないかもしれない。そう言うと、キャストの方はミステリアスアイランドの秘密の合言葉を教えてくれました。

「これでもう、あなたはネモ船長の立派なクルーです。だからそんなに弱気になってはいけません。必ず元気になってまた遊びにきてください」

私のもとに戻ってきたとき、主人は泣いていました。そして「絶対に手術を成功させて、またここへ来る」と力強く決意していました。

主人からのお礼の気持ちを、キャストの方にお伝えいただけたら幸いです。

※ミステリアスアイランド唯一のショップである「ノーチラス」のバックグラウンドストーリーは「かつてノーチラス号の修理工場だった施設を改造してショップにした」というもの。



アリエルのグリーティンググロットでは、娘がアリエルと握手するのは難しいと思っていました。アリエルは貝殻に座ったままだし、娘は車いすを利用しているからです。おまけに娘が他人から話しかけるなんて、ふだんではありえないことでした。

ところがアリエルは、娘の顔の近くまで腰をかがめて言いました。

「あなたはもう王子様に会った？ 私は早く王子様に会いたいわ！」

アリエルはおしゃれで好奇心いっぱい。そしてなによりも優しい。娘がまだ元気だったころ、一緒によく家でみた映画『リトル・マーメイド』のアリエルそのものでした。だから胸が詰まって思わず泣いてしまったのです。大丈夫よ、大丈夫と私の腕を取ってささやき、「なんて可愛くて美しい娘さんなのかしら！」と何度も娘のことを褒めてくれました。

夢のような体験でした。大変な日常や、厳しい運命を忘れることができました。母子ともに救われたような気がします。

ディズニーはいつでもどこでも、笑顔のキャストさんでいっぱいですね。大変だったけど娘を外に連れ出して本当によかった。



レストランの研修で、中年のご夫婦を担当させていただいた時のことです。

「こんにちは！」と元気よくあいさつをしたとき、お二人の耳が不自由であることに気づきました。そのときは、手話に精通したキャストがおらず、メニューを指さしながらなんとかご案内しました。

ご夫婦は食事を楽しんでらっしゃる様子でしたが、私の中にはもどかしさが残りました。来ていただいたお礼と、お帰りまで存分に楽しんでいただきました

いという思いをどうしても伝えなかったからです。とっさに走り書きしたメモを、伝票に添えました。

しばらくするとご夫婦は席を立ちましたが、残念ながら私は他のゲストに対応していたため、お見送りをすることができませんでした。せめておじぎくらいしたかったのですが…。

今日一日、あのお二人は楽しめたのだろうか？ 満足していただけたのかな？ メモを渡したのはやり過ぎだったかな？ そんなことを考えたり、反省したりしながら、テーブルの後片付けをはじめたとき、紙のランチョンマットになにか書いてあるのを見つけました。

「優しい気持ちをありがとう。これからまたいっぱい楽しめます」

胸がじーんとしました。

ご夫婦から伝えることの大切さを教わり、いまでもその気持ちとランチョンマットを大切に保管しています。



キャストになって間もないころ、担当したテーブルにいた小さな男の子が「ぼく、大きくなったらディズニーランドで働くんだ」と言ってくれました。

「じゃあいっぱい勉強して、すてきなお兄ちゃんになってね」

「うん。ぼくいっぱいがんばるから、待っててね」

二人で指切りをしました。

何年か経ってから、その男の子とばったり再会しました。その場所はバックステージです。彼は高校生になり、キャストになっていたのです。初々しいコスチューム姿でした。

「あのときの約束どおり、キャストになりました。いつかお姉さんみたいな、カッコいいキャストになるから応援してください」

今この瞬間も、どこかで、私のことを見て「キャストになりたい」と思っている小さいゲストがいるかもしれない。そう思うと毎日が楽しくて仕方

ありません。もっと素敵にキャストになれるように、がんばっていこうと思います。



季節はお盆です。私は夜のパークをパトロールしていました。

盛大なファンファーレが鳴り響くと、東京ディズニーランド・エレクトリカルパレード・ドリームライツがはじまります。

光輝くディズニーのスターたちを乗せたフロートの一団が近づいていくと、パレードルート周辺にはあっと活気と笑顔があふれました。それは私にとってはいつもの光景でした。

ふと見ると、80歳くらいのご婦人が前屈みになっていました。その背中をご主人がさすっています。トラブルか緊急事態か、と緊張してそばに駆け寄り「どうかなさいましたか？ なにかお困りですか？」とたずねました。

するとご婦人は涙をすすりながらおっしゃいました。

「戦争でひとり息子をなくした私たちは、いつもこの時期になると東京のお墓に会いにくるんです。その帰りに今日はじめてこちらにきて…わけもわからずみなさんと一緒に座っていたら、このパレードがはじまって。こんなにきれいな光のパレードを見られて感激したんです。戦争中は毎晩、電気を消して、息をひそめていたんですもの。日本は平和になったんだなって思ったら急に涙が止まらなくなって」

息子と一緒に見たかった、と最後にぼつりと言いました。

平和なのが普通だと思っていた私にとっては衝撃の言葉でした。

その夜、ふたたびこのご夫婦を見かけました。

笑顔で、お城を仲良く見上げるお二人。そのシルエットが花火に浮かび上がっていました。

□たくさんありがとう

●ミニーちゃんが妊婦さんのおなかをなでたあと、ポーズをつくって＜がんばって産むのよ！＞＜応援してるから＞というジェスチャーをしていました。見

ていて心が温かくなりました。

●ベンチで眠ってしまった娘の横を、7人のこびとたちがやってきました。こびとたちは、シーツというポーズをしながら通り過ぎていきました。その心づかいにすごく感動してしまいました。ありがとうございます。

●ゲート近くでプーさんを見つけて、うれしくて思いっきり抱きついたら頭突きしてしまいました。プーさんはイテテという身振りをしたあと、一生懸命<大丈夫><元気だよ>ということをアピールしてくれました。ありがとう！

●開園直後、ウエスタンリバー鉄道からまだ人通りのすくない園内に向かってぼんやり手を振っているお兄さんに向かって、ちょっとだけ手を振り返してみたら、突然満面の笑みでぶんぶん手を振ってくれました。まるで自分にだけ笑顔を向けてくれたようでドキドキしました。

ビッグサンダーマウンテンとすれ違うときに手を振ってみたら、乗客の人たち全員がワーッと手を振り返してくれて楽しかったです。ディズニーランドにはそういうことができる雰囲気があってすごく好きです。

●ゲートの近くでぽつんと友だちを待っていたら、デイジーが駆け寄ってきて<どうしたの？>という仕草をしました。「友だちを待ってるの」と話すと、<一緒に待っててあげる>というジェスチャー。3分くらいの間ずっと私と居てくれました。友だちが全員そろったあと、みんなで一緒に写真を撮りました。今でもデイジーが一番好きなキャラクターです。

●障害を持った同僚を連れていったとき、ミッキーはずっと車いすに乗ったその人の手をさすってくれていました。写真を撮るときもずっとそばに寄り添っていました。ミッキーの愛情に思わず泣いてしまいました。

●キャラブレ（キャラクターブレイクファースト）に行ったときのこと。キャラクターたちからサインをもらっていた子どもが、なにを思ったのか自分で書いたサインをピノキオに渡してしまいました。するとピノキオは<うれしい>というアクションをして、その様子を見ていたキャストが「良かったね～ピノ

キオ。帰ったらおじいさんに見せようね」と言ってくれました。  
気の利いたことを言ってくれるなど感心ながら「お邪魔になると思うので、さっきの紙、捨ててくださいね」と言ったら、そのキャストは「ダメですよ～。これはおじいさんに見せるんですから。ピノキオもそうしたいのに、取り上げたらがっかりしちゃいますよ」と笑顔で言ってくれました。ありがとうございます。

●私がまだ小学生だった頃、幼い妹が買ったばかりのおみやげを落として割ってしまいました。するとレジ係のキャストが「ごめんね。包み方が悪かったんだね」と言ってまったく新しい陶器を無償で、しかもかなり嚴重に包んで渡してくれました。妹が嫌な思い出を残さないようにしてくれたキャストの姿にとっても感動しました。もう10年以上経ちますが、今でも憶えています。ありがとうございます。

●シーに行ったとき、彼氏とささいなことでケンカしてしまいました。彼氏と少しはなれた場所でひとりしていると、チップが<1人?>と接してきました。「彼とケンカしちゃったの」というと、チップは私を彼氏のところまで連れていってくれました。そして<仲直りして>という感じで、私と彼氏の手をつなげてくれました。おかげで仲直りができてしまいました。ケンカしていたときはパークに来たことを後悔していたけど、楽しい思い出になりました。チップ、ありがとう！

●雨が降り出していて、人はけっこう少なくて、そんなときにホーンテッドマンションに乗ったら急に乗り物がストップしました。そして少し経ってからこんな放送が流れました。「どうやら館の亡霊たちがいたずらしてしまったようだ。すまないが、もう少し待ってくれ」機械の故障だったのかもしれないけど、さすがは夢の国だと思いました。素敵な演出をありがとう！

## ■参考・引用

本書を執筆するにあたって、以上の書籍・サイトから引用させていただきました

た。

この場を借りて、厚くお礼を申し上げます。